

学界消息

一九五三年度

京大文学部史学科

卒業生及び卒業論文題目

国史学専攻

〔旧制〕

六波羅探題の変質過程
薬師寺金堂薬師三尊像

条約改正小論

明治中期の愛国主義

中世村落に於ける農民と地侍に関する一考察

北村透谷論

米騒動の一考察

平戸イギリス商館の失敗について

〔新制〕

近世に於ける丹後縮緬機業の発展

学界消息

平安遷都前後における政治過程の一考察

察

中世末期における国人層の動向

永井荷風小論

近世に於ける灘酒造業の発展

中世国衙領の基礎的考察

和泉国大島庄大番舍人の中世的動向

幸徳秋水と初期労働運動

近世農村の構造変遷

東洋史学専攻

〔旧制〕

唐代に於ける韃靼系名族の一形態——特に

元氏、長孫氏についての考察

三階教の布施観

巴蜀開国伝説についての一考察

康有为の歴史的な評價

前漢時代の商工業者について——特にその

社会的役割と抑商政策の意義

義和團事変について——清朝の崩壊と初期

的ナショナリズムの展開として

太平天国革命を必然ならしめた社会的条

件に関する一考察

泉谷 康夫

上野 公

久保 博一

橋本 光隆

藤本 康彦

八尾 幸江

芳村 治雄

脇田 修

〔新制〕

唐代禅宗の発展——四川の念仏禅

西洋史学専攻

〔旧制〕

アメリカ革命直前に於ける英本国の植民

地西部政策——一七六三年の「勅令」を

中心として——

清教主義の研究

ビョートル時代に於けるマニユファクチュ

アアの形体——十七、八世紀ロシア社会

経済史への一試論——

モリエールをめぐつて、かれの位置づけ

についての歴史的な考察

カリリング時代のグルンドヘルシャフト

について——土地所有形態としての面

に——

ルネサンスの概念に就いて

十九世紀初頭ドイツ精神の一角——アダ

ム・ミューラーを中心とした政治的ロー

マン派の課題——

帝国主義時代の海外投資に関する一考察

——デイスレイリによる運河株買収とそ

の前後——

笠沙 雅章

小野利三郎

岡田 光司

並川喜代典

藤本 優

西岡 豊

氏原 寛

長江 芳夫

松村 正樹

ゲルマン商業の起源と発展

堀内 一徳

イネの分布と品種改良

伊藤 伸之

制九名である。この日、小葉田、柴田両教授、赤松助教授ほか卒業生・学生約四〇名が集い、これらの新卒業生の予餞会を行った。卒業生への祝賀激励の言葉に対し、各卒業生から今後の決意など互に交歓し、和気あいあい裡に、六時過ぎ散会した。

二月革命に於ける労働問題

樋口 暘

アメリカ都市の発達

木下 良

京大東洋史関係

共和党誕生期の問題——南北戦争前史の研究——

篠田 潔

土佐紙の歴史経済地理学的研究

松岡 直夫

卒業生から今後の決意など互に交歓し、和気あいあい裡に、六時過ぎ散会した。

ドイツ市民社会と自由主義に関する一考察——E・T・A・ホフマンとH・ハイネをめぐって——

篠村 和子

阿蘇火口原の農村

押野 昭生

卒業生から今後の決意など互に交歓し、和気あいあい裡に、六時過ぎ散会した。

農業問題よりみたイギリス革命

長沼忠兵衛

京阪神地方に於ける電力資源について

立入 哲

卒業生から今後の決意など互に交歓し、和気あいあい裡に、六時過ぎ散会した。

「アカルイナの人々」研究

吉住 治

大山原野の開拓に就いて

水田 昭夫

卒業生から今後の決意など互に交歓し、和気あいあい裡に、六時過ぎ散会した。

合衆国西漸運動に於けるフランティシヨンについての一考察

安井 玄

現代日本考古学研究小史

陳 顯明

卒業生から今後の決意など互に交歓し、和気あいあい裡に、六時過ぎ散会した。

北米植民地に於けるビュリタンの一考察

園田 房子

戦国および漢代工芸の文様帯構成についての一考察

金関 恕

卒業生から今後の決意など互に交歓し、和気あいあい裡に、六時過ぎ散会した。

ローマ帝国に於ける都市制度の推移

磯田 和雄

中国の明器

星野 省吾

卒業生から今後の決意など互に交歓し、和気あいあい裡に、六時過ぎ散会した。

一八四八年の二月革命

手塚 晃

蘭学史における二三の問題

大月 明

卒業生から今後の決意など互に交歓し、和気あいあい裡に、六時過ぎ散会した。

詩から哲学へ——古典アテナイ末期の精神史——

藤縄 謙三

尾服における領主層

山形 友郎

卒業生から今後の決意など互に交歓し、和気あいあい裡に、六時過ぎ散会した。

一八四八年のドイツ革命についての一小論——バーデンの場合——

柏尾 洋介

初期労働運動における幸徳秋水

芳村 治雄

卒業生から今後の決意など互に交歓し、和気あいあい裡に、六時過ぎ散会した。

地理学専攻

〔旧制〕

国史卒業生予餞会 二月一八日(水)

一九五三年の国史卒業生は、旧制八名、新

卒業生から今後の決意など互に交歓し、和気あいあい裡に、六時過ぎ散会した。

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

〔新制〕

京大地理学関係

地理学談話会 三月六日

別記の通り卒業論文の発表会を行い、続いて卒業生の予餞会を行った。(参加者四〇名)

地理学教筆巡見旅行

今年度の見学旅行はそのフィールドを暖国高知に求めた。織田教授・藤岡教授・吉田教官をはじめとして十六名の参加をみ、三月二十一日の夜大阪を船出した。高知大学地理教室の山崎・谷淵両助教の懇切な御案内を忝くし、桂浜の自然美、十市村の野菜促成栽培、高知の和紙工場・城下町景観、龍河洞のエロージョン・弥生式遺跡等その見聞は多岐にわたつて意義が深かつた。二十三日朝高知で解散後、大部分の者は宇和島・松山を経由して新居浜に赴き、住友財閥によつて創められた新居浜コンビナートとも呼ばれるべき総合工業地帯を見学した。とりわけ、蒸風呂のような別子銅山坑内での審みな視察は又とない貴重な印象であつたと思う。

京大考古学関係

考古学談話会 三月一二日午後一時 於学友

学界消息

会館 卒業生予餞会

滋賀県野洲郡祇王村宮山古墳発掘、

滋賀県の依頼により、樋口隆康・金関恕・小野山節三名が従事。二月一八日——三月五日。

五日。

京都府相楽郡高麗村大塚山古墳発掘

鉄道工事のため石室露出、破壊。緊急に整理調査をす。樋口隆康・藤沢長治・林巳奈夫・金関恕・小野山節五名が従事。三月二

七日——四月四日。

七日——四月四日。

京大民俗学会彙報

約一年半ほど例会を休んでおりましたが、昨年十二月から、左記により、再出発いたしました。

例会 一二月九日午後七時、於京大薬友会館

神職の地位について 萩原 龍夫氏

例会 二月六日午後六時、於京大薬友会館

地頭家の族図祭 竹田 聰洲氏

熱田信仰について 井上 頼寿氏

会員消息

新入会員(復活会員を含む)

石原 道博
位野木 寿一

植村 雅彦

上田 宏範
大阪市立大学
附属図書館
大井 ミノブ

笠石 隆秀
河野 文麿

河村 盛一
金子 功太郎

河原 由郎
木代 修一

木村 武夫

大阪市住吉区杉本町

栗原明信
桑田六郎
小糸伸一
小玉新次郎
小林尊志
西京大学文学部
室科歴史学研究所
佐和隆研
齊藤恒清
渋谷有教
清原宣雄
聖心女子大学
図書館
滝川政次郎
高橋邦彦
田中豊治

京都市右京区桂市の前町
三一

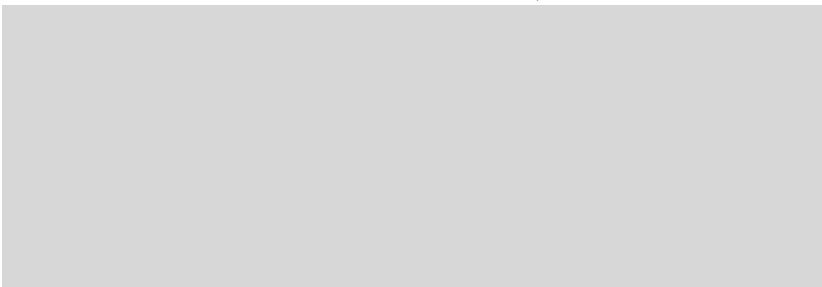
東京都渋谷区宮代町一

田中勝蔵
檀上安男
中部よし子
西山松之助
日本女子大学
史学研究室
布目潮凜
野上都志江
浜口友三郎
馬場憲三
平田嘉三
古谷俊夫
別枝篤彦
堀田伊八郎
松永雅生
前嶋信次
毛利久

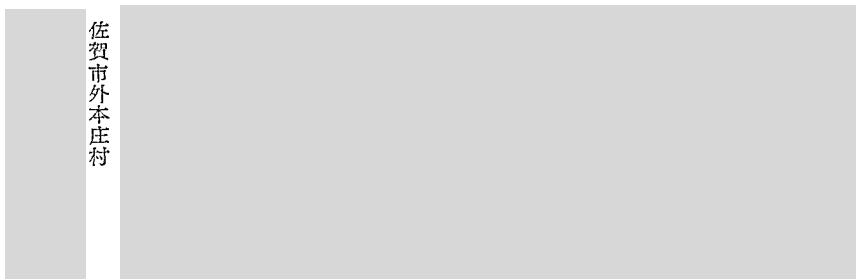
東京都文京区高田豊川町

伊藤祐昭
有賀鉄太郎
足利惇氏
井島勉
臼井二尚
小川環樹
重沢俊郎
高田三郎
長尾雅人
西谷啓治
野間光辰
松尾義海
松平千秋
吉川幸次郎
村田治郎
京都大学工学部
建築学研究室
堀江保蔵
秋宗康子
菊竹弘
伊東多三郎
岩沢愿彦

奥野高広
笠原一男
金井 円
菊池武雄
菊地勇次郎
小西四郎
齊木一馬
佐藤進一
杉山 博
田中健夫



辻彦三郎
新田英治
花田雄吉
宝月圭吾
村井益男
桃 裕行
弥永貞三
山中 裕
山本武夫
西田 直
佐賀大学
越智重明
八木法恩

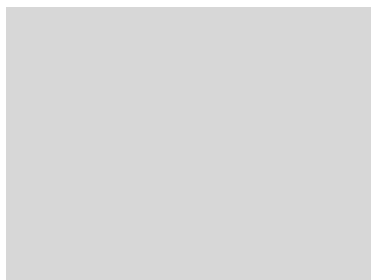
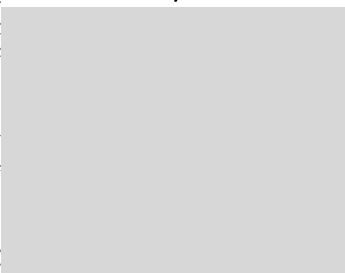


佐賀市外本庄村

狩野真禎
竺沙雅章
有山勝隆
大村四朗
岡本 仁
松井勉夫
北村篤太郎
藤原良裕
池内 宏
木島弥二
田口聖炯
定 恵苗
塩見高年
堀 朋近
藤田五郎
向井芳彦

会員死亡

右の会員諸氏は、逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。



III 編 集 後 記 III

三五巻の完結が少しく遅れたために、この号の発刊にも響いてきましたが、いま三六巻一号を送ります。既に次号の編集も終り、年末の大会までには三六巻を完結する予定で、史林の出版についてのいろんな条件も次第に好転し、委員一同張り切っているわけです。その意気込みは、しぜん史林の内容にも反映していつていることは、本号の豊富な内容をみていただければ分ると思います。

けれども、たゞ一つ残念なのは、史林の出版が不規則であつた頃に、会費の滞納が尨大な額に上つてしまつていたことです。さいきんこの滞納会費の回収は、どんどん進んでいますが、いま一そう会員の皆様の積極的な御協力を切にお願いしたいと思ひます。

それから、こんごさらに会員相互の連絡を緊密にしたいと考え、会員消息欄を設けるこ

とにしました。入会、退会、転勤、動靜等々をその都度ぜひお知らせいただきたいと思ひます。また、学問の發展のために、他の諸学会との提携にも努力してゐます。そうしたなかで、史林と史学研究会の發展のために、会員の皆様のいろんな御教示、御批判や、御協力をわれわれは切望しているわけです。

(門協)

御 願 い

史林及び史学研究会の直接の事務運営は、次のような分担で行つております。史林及び史学研究会に関する御批判や御希望を、なるべく多く寄せて下さる様に御願ひ致します。

編集主任	赤松俊秀
編集委員	池田 誠 (東洋史)
同	石川栄吉 (地理学)
同	越智武臣 (西洋史)
同	門脇禎二 (日本史)

100

同	藤沢長治 (考古学)
庶務主任	佐伯 富
庶務委員	河地重造 (東洋史)
同	林巳奈夫 (考古学)
同	三吉 希 (日本史)
會計主任	藤岡謙二郎
會計委員	瀬原義生 (西洋史)
同	末尾至行 (地理学)

史 林 (第三六巻、一号)

一九五三年五月一五日 印刷
 一九五三年五月二〇日 発行
 定価 百円

発行所 史 学 研 究 会

京都市左京区吉田本町
 京都大学文学部内

振替大阪一四五五六番
 京都市下京区七条御所ノ内東町三九

印刷所 中村印刷株式会社